維新の政治―「改革」の幻惑

写真の『おおさかの住民と自治』の「話題の本」に寄稿した。原稿を送ったのは確か 2 月末だったと思うが、冊子が一昨日に届いたので原稿を紹介したい。「話題の本」として何を取りあげるか迷ったが、「おおさかの住民と自治」にふさわしい『世界』3 月号特集 2「維新の政治―『改革』の幻惑」にした。

名古屋から大阪に転居して 4 年半。「維新政治」なるものに振り回されてきた。2020 年 11 月の大阪市廃止の是非を問う住民投票をはじめ、私なりに数多くのレポートを投稿して、声をあげてきた。いまは夢洲での IR カジノ・万博に問題を投げかけている。

「話題の本」として何がいいか迷うが、岩波書店の月刊誌『世界』3 月号を取りあげたい。『世界』は大学時代から毎月読んできたが、本号に「維新の政治」と題した特集が組まれているからだ。特集は次の 4 本の論稿で構成されている。松本創「維新を勝たせる心理と論理」、久保敬・名田正廣・斉加尚代「子どもがいて、地域があって、学校がある」、平松邦夫「大阪と市民自治」、三木義一「身を切る改革を実行したいなら」

ノンフィクションライターの松本は、先の衆院選の維新躍進から話をはじめる。衆院選後の大阪では、メディアの方からこぞって維新人気にすり寄る動きがますます強まっている。事例として読売新聞大阪本社と大阪府の「包括連携協定」、元日の毎日放送「維新トーク番組」を取りあげる。維新人気とメディアの影響、維新は「個人化時代」に強い政党など問題を提起する。私には、これまで維新を支持する人びとの声をあまり聞いてこなかったという反省がある。遅ればせながら今、一人一人の話をじっくり聞いて歩こうと考えていると締めくくる。違和感を覚える指摘もあり、あとからコメントしたい。

大阪の教育問題をめぐる 3 人の対談は、大阪市立木川小学校の久保校長「提言」からはじまる（提言は資料として掲載）。市立港中学校の名田校長は、大阪の教育が変えられてきてから 10 年。競争にさらされ続ければ、自分たちの学校さえよければという思考停止にもなりかねない。その波に飲まれないためにも提言は重要です。久保校長はルールがあればルールに従うのが当然、といったことが強調されています。でもそのルールは誰が作ったのか、どうやって作ったのか、そういうことを私たちは問わなくなってきた。ルールを守るより、自分たちでルールを作る経験を、小さい頃からしていかなくてはいけないのではないでしょうか。

2007～11 年に大阪市長をつとめた平松は、維新の政治が大阪の市民自治のありかたを変質させつつある。元市長として、市民とともに走り回りながら、肌感覚として問題を把握したいと思い、「市民協働」という言葉を活動のキーワードに選んだ。大阪では維新の府政・市政が、10 年以上続いている。それはなぜなのか。そのもとで何が起き

ているのか。それを探り、私たちの取り組みの方向を考えるときには、住民のいのち・くらしを守るために自治体は何をすべきなのか、という原点に立ち戻るべきだろう。この出発点の共有さえできれば、維新を支持している市民とも対話は可能であるはずだ。

三木・青山学院大学元学長は、税制面から議員の歳費など維新の身を切る改革について検討する。国民から 250 円ずつかすめ取る政党交付金は「政治家のための政治」そのものである。身を切るなら、ここからでは、という質問に対して維新は「一定スパンの財源は必要」などと答えているが、身を切る覚悟はしているのだろうか？1 日 100 万円を問題提起した当の本人が、収支報告書の不記載で刑事告発されたことも、身を切る改革の象徴的な出来事として記憶されよう。身を切るといいながら、身から出た錆だらけで刀が切れなくなっていなければよいが。

特集の簡単な紹介からも、「維新の政治」の現実が読みとれる。大阪に住んでいて、なぜ維新がここまで強いのか考えてきた。松本によれば、維新の強みは大阪の政治行政を 10 年にわたって握ってきたという事実にある。まさに権力を握り、「大阪の与党」としての地位を存分に活用してきたことが大きい。問題の先送りと疑惑の隠ぺい、「やってる感」を出し続け、それをマスコミが批判せずに拡散する。それでコロナ死者全国一なのに、「吉村さん、ようやってる」となってしまう。維新は大阪の「実績」に味をしめて、自治体の権力奪取を全国に広めようとしている。

松本論文で気になるのは、維新人気や強さに目が奪われてしまい、権力を握る維新への批判的な視点が弱まっていることだ。例えば、IR カジノといった維新の「成長戦略」の欠陥にも注視すべきではないか。維新を批判する人たちが「自分らだけで固まっている」といった一面的な見方にも違和感を覚える。「維新に投票している人も含めて、この地域の今と未来について語りあうこと、違いを超えてつながりあうことで、自治の力を取り戻すことだ。その力こそが、維新の『改革』の幻惑を取り除く源泉となるだろう」という平松元市長の言葉に同感する。

（2022 年 4 月 27 日）